

# キタのまちのニュースレター



今回の華展で設置された島台

## 会館インタビュー

### 「嵯峨御流 いけばな教室」

講師：溝渕 佐知甫

平安初期、嵯峨天皇が菊を花瓶に挿したことが発祥と言われている『嵯峨御流』。全国的に有名な華道の流派で、北区の人であれば阪急うめだ本店の前にあるコンコースウィンドーで、お正月などに見かけたことがあるのではないのでしょうか。そんな『嵯峨御流』のいけばな教室を大淀コミュニティセンターで開講されている溝渕 佐知甫さんにお話を伺いました。

インタビュアー：溝渕さんが華道を始められたきっかけは何でしょうか

溝渕さん：「きっかけは高校生のとき、近くに華道の教室ができて、そこに通ってみようかなと思ったのが始まりですね」

イ：それからずっと続けられて、今では講師になられたんですね。

溝渕：「一度やり始めたら、とことんやらないと気がすまないんです。だから指導も突き詰めようと、生徒を講師にできるように嵯峨御流の指導の資格も取りました」

イ：すごく真摯に向き合ってるんですね。普通の教室ではどのように指導されていますか。

溝渕：「まず私が見本を生けて、同じ材料で皆さんに生けてもらいます。初めは一本ずつ教えていたんですけど、中には30年以上通われている人もいますので、見た後はみんなそれぞれやっていますね」

実は溝渕さんは、過去に大淀コミュニティセンターの講習会で講師を務めていた。そのときの生徒さんが、現在も通われているという。イ：こちらの教室では3年ごとに北区のセンターで花展をされていたそうですね。コロナの影響が収まり、ようやく今年再開でき、会場が変わっての開催でしたがいかがでしたでしょうか。

溝渕：「今年は会場が変わって天井が高くなったので、島台に挑戦しました。それにふさわしい花器を探すのに、生徒の方にもたくさんお手伝いしていただきましたし、久しぶりなのもあって大変でした。でもたくさんの方に来てもらえて、盛況だったと思います」

イ：私も拝見させていただきました。例年の「文化のつどい」でも展示をされておりますが、その時とは展示方法が違い勉強になりました。どの作品も美しかったです。展示の生け花で気をつけていることはありますか。

溝渕：「私はよく稽古のときに『お花と話して生けて』と言っています。普段と違い何もないところから生けるわけですが、「この枝はここ」と1本の枝に惚れ込んでしまうと、なかなかお花と合わない時に煮詰まってしまう。そういう時に「あなたがそう思っている、そのお花は違う枝がいいかもしれないよ」と花にあうものを与えられた材料から選ぶよう促します。その方がしっくりきたりするんです。」

イ：なるほど、自分の理想だけにこだわりすぎてもいけないことですね。自分を見つめ直すいい機会になりそうです。では最後に読者の方へ一言お願いします

溝渕：「今はいろんな人が問題を抱えています。そういうことを忘れる時間も必要と思いますが、華道というのは一生懸命お花と向き合うので、世俗を忘れるといいますか、心が安らぎます。花と向かい合って喋ってもらえるような感じでやっていただくと嬉しいなと思います。」

イ：ありがとうございました。



大小さまざまな作品が並んでいる



こだわりの花器も見どころ

### 『嵯峨御流 いけばな教室』

■場所：大淀コミュニティセンター

■曜日・時間：月2回 火曜日 18時30分から  
月3回 水曜日 10時15分から

※その他にも北区民センターで煎茶サークルも開講中

## 落語の世界を広げる 「はなし画」

『落語と絵本のアンヌアール』では披露された三題噺をもとに、さまざまな『はなし画』が生まれます。今回は130枚以上の絵が集まりました。そこで『はなし画』の魅力の一部をご紹介します。



↑前島美蘭さんの応募作。  
落語の世界とは一味違うロマンスあふれる作品。



↑井上優那さんの応募作。  
落語家をイメージしたという人物像とポップな絵柄がマッチしている

今回特に印象的だったのは、桂福点さんの三題噺を描いた作品。泥棒と盲目の女性による笑劇が繰り広げられるのですが、その人物像は多彩でした。中でも上図の絵を書いた前島さんは最後のお嬢さんの一言からロマンスを表現したと語っており、同じ題材のなかでも目立っていました。泥棒もどこかイケメン風で、落語が少女漫画のようになっており驚きです。

一方で下の絵は、福点さんの声色や語り口からイメージを得たそうでポップな絵柄に。泥棒の姿も着物やメガネをかけていることから、噺家をモチーフにしたんじゃないかと想像できます。作者によって注目している点が異なり、落語そのものの見方も変わってくるのが興味深いですね。

北区に中之島美術館がオープンし、ご近所でアートに触れる機会も増えました。三題噺から着想し「はなし画」を描く「このイベント」は、コミュニティ発の参加型アートイベントです。詳しくは「落語と絵本のアンヌアール」HPを見てみてください。スタッフ一同「はなし画」が絵本に育つことを願っています。

## ボートの灯り

キタのまちのニューズレター 編集室

大川(旧・淀川)から中之島の東端。剣先では北に堂島川、南に土佐堀川(これに分岐して東横堀川)を臨む。西端、端建蔵橋の先っちょで、大阪湾に注ぐ安治川、南進する木津川にも出会う。これに「キタの北」の淀川を加えると、北区の川で「都市・大阪」を知ることができる。また、江戸期・中之島とその周辺は、全国諸藩100余もの「蔵屋敷が軒を並べた」……これに注目すれば、日本全土との“ふるさと交流便”の起源?にも出会える。

インバウンド人気が復調し、繁華な場所の賑わいは万国共有に戻ったが、ふるさと「キタ」の見慣れた風景には「変化とそのまま」が隣り合っている。

写真は、最近できた歩道橋から東を眺め「土佐堀川の曲がり」をポチっている。昭和の終わり頃、この付近に漕ぎ出す「大川沿いに艇庫を持つ競技用ボート」は珍しくなかった。ある時、その細長いボート同士がここで乾坤一擲、競り合う姿を見かけた。それは夕暮れ時で、舳先と舟尻の小さな灯りが、先へ先へと突っつき合う姿が可笑しく美しかった。それを肥後橋の上から眺めていた。

都心生活者は戻ったが、このビジネス街付近でボートを見かけることはなくなった。ところが、ビジネス一色では「コミュニティの磁力」に欠け、人を引き寄せることは難しい時代になっている。見慣れた風景にコミュニティの磁力を尋ね、訪ね歩いてみることにする。





# キタ歩き日本旅



山形県  
の巻

「大阪駅前ビル」には、47都道府県のうち約半数にもなる日本全国の「道府県事務所」がオフィスを構えています。少し大きさに表現すると「日本が大阪駅前ビルに勢ぞろい！」の風情です。SNS万能の時代ですが、全国各地の旅や物産の様子が「人肌感覚」で知ることができます。この連載は、旅する感覚で北区の大阪駅前ビルを訪ね教えていただいた情報です。大阪駅前ビルの歴史も魅力的！「わが町の旅」としていかがでしょうか。



「上杉雪灯籠まつり」。2/10(土)～11(日)に開催される。写真出典：山形県HP

## 紅白それぞれが美しい山形へ

今回は山形県大阪事務所に商工観光ご担当の須藤さんを訪ねました。

上方になじみ深い山形県の名産に紅花があります。山形に紅花が入ってきたのは室町末期と考えられています。江戸期には紅を濃縮し「紅餅」に加工して、その多くが船で上方に運ばれました。着物の染色や化粧品に用いた貴重品でとても高価なものです。気候風土に恵まれていたことから、紅花の栽培は最上川流域一円で盛んでした。今も紅花栽培は盛んで、紅花が咲き誇る7月には山形県各地で紅花にちなんだ様々なイベントが開催されています。

「初夏の紅花」見事なんでしょうね。冬はやっぱり雪の催しでしょうか？

雪に関連するイベントはさらに盛んです。数えると数限りなくあるのですが……「蔵王樹氷まつり」「上杉雪灯籠まつり」「月山志津温泉 雪旅籠の灯り」「ひがしね雪まつり」「尾花沢雪まつり」「ながい雪灯り回廊まつり」「まほろば冬

咲きぼたんまつり」「中津川雪まつり」「新庄雪まつり」「おくら雪ものがたり」「鶴岡冬まつり」……まだまだありますが……

すいません。紙幅に限りがあるので、ここからは「山形の雪まつり」で検索し、すべて拝見します。ところで先ほどの「舟運」ですが、やはり北前船と関係が深いのでしょうか？

そのとおりです。山形には最上川の舟運で発展した歴史があり、上流に整備されたそれぞれの船着き場から、西廻り航路の起点「酒田の湊」に物資が集まり、上方を目指しました。

西廻りの航路を確立した河村瑞賢は上方、特に大阪でもよく知られる歴史上の人物です。当時、まちのどまん中に流れ込み、たびたび氾濫する河川の流れを、安治川の開削で海へと導いた河川工事の達人でした。往時、中之島両岸に立ち並ぶ全国諸藩100余の蔵屋敷群も「瑞賢の仕事」なくして無く、そ

の意味で「近代大阪の原型」をつくった人です。

山形と大阪は、河村瑞賢という歴史上の人物でつながっていたんですね。

紅白それぞれが美しい山形へ！ 旅に出かけたくなりました。



「咲かせて摘んで紅にして」紅の花は黄色い！



もがみべにばな 最上紅花の「紅餅」で染める白鷹町の人気体験。写真出典：いずれも、山形県公式観光サイト

山形県大阪事務所

北区梅田1-3-1-800 大阪駅前第1ビル8階 ☎06-6341-6816(開館 平日9時～17時15分 / 土日祝・年末年始は休み)

# 浪花百景歳時記

大阪大学総合学術博物館  
研究支援推進員

波瀬山祥子

勝負服は「梅」パッチで決まり！

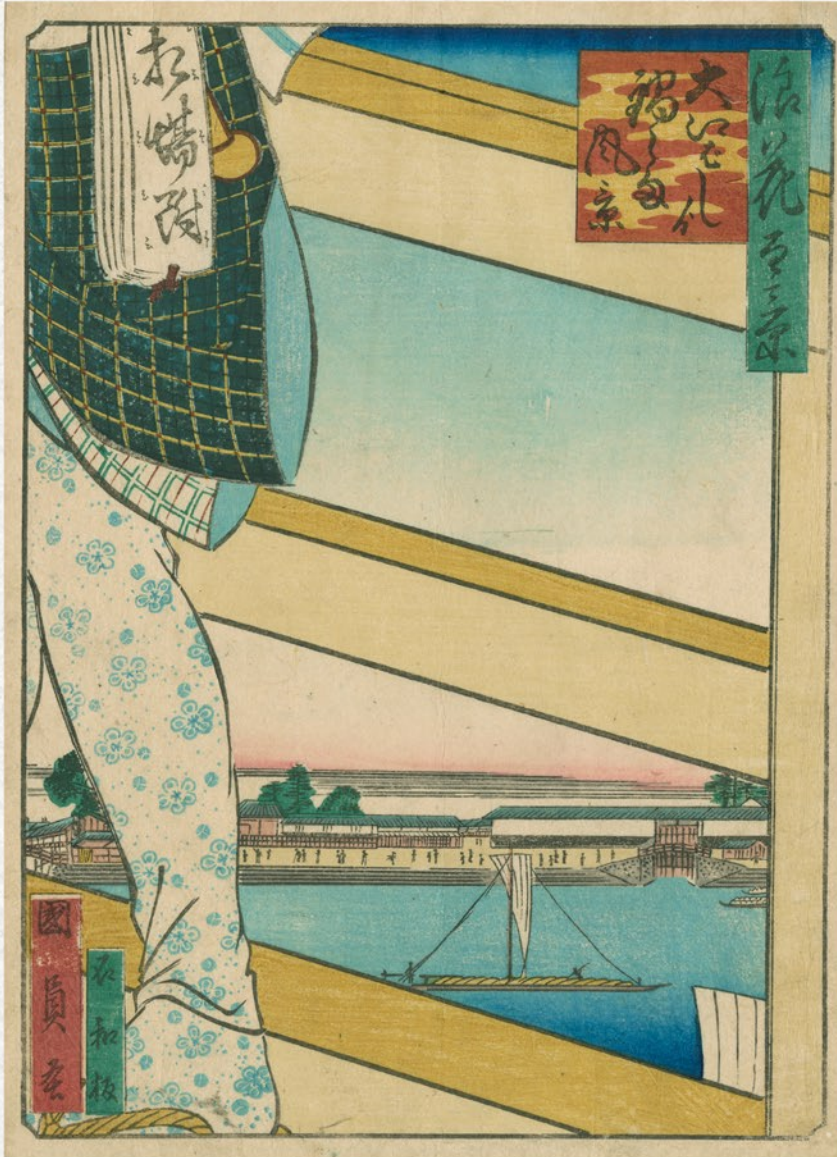
## 第七十一景

「大江ばしより鍋しま風景」

国員画

天下の台所のシンボル、堂島の米市場に向かって大江橋を渡る仲買人。現代なら淀屋橋駅から出勤するルートですが、当時の橋は真ん中が高く、この絵の仲買人も橋をのぼり気味なので商売繁盛、相場も上昇中？

道行ナビゲーター 大阪大学名誉教授 橋爪節也



大江橋を渡る男の腰から足だけをズームした、歌川広重ばりの大胆な構図が目を引きまします。欄干越しに堂島川を距て、むこうは鍋島藩の蔵屋敷。現在の大阪高等裁判所の辺りです。「相場附」と書かれた帳面を腰に下げ、白地に水色の梅紋のパッチ(股引)が洒落ています。帳面の後ろに見える黄色いのは、筆と墨が収まる携帯用筆記具の矢立です。この出立ち……、堂島米市に向かう米仲買人に間違いないでしょう。空は朝焼け色に染まり一日の始まりを知らせ

ます。勝つか負けるか、今日の取引やいかに。

大江橋は、元禄年間に架けられた堂島五橋の一つで、浪花三大橋(天満橋・天神橋・難波橋)に次ぐ大きさです。奥に見える白壁の建物が鍋島藩の蔵屋敷で諸藩の蔵屋敷でも最大級の敷面積を誇り、東側に米蔵、西側には、伊万里や有田など佐賀の名産を収める陶器蔵が並びました。荷物を運んできた船は、右下に描かれる舟入橋をくぐって屋敷内に入ることが可能となっています。蔵屋敷の前は「鍋島の浜」とよばれ、人々の憩いの場となっていました。大坂生まれの漢詩人・頼山陽(二七八一〜一八三二)が実母と付近で天神祭の船渡御を見物したように、仲買人の梅紋のパッチも天神さんを意識するのでしょうか。脇差を指す武士、杖をつく老人、荷物棒を担ぐ人などが小さいながらもシルエット的確に表現され、楽しい会話が続いてきそうです。さらに画面左には北の新天地へと流れ込む蜷川の入口が見えます。米市で勝負をかける商人と、平穏な市井の風景が対比的な一図です。

現在の大江橋は御堂筋の整備に伴って、昭和一〇年(一九三五)に淀屋橋とともに架け替えられました。橋のデザインは一般公募されて、武田五一の設計で鉄骨鉄筋コンクリート製のアーチ橋になりました。近代の名橋として中之島の景観に華を添え、二〇〇八年に国の重要文化財に指定されます。梅が美しいこの季節、梅柄のアイテムを着けて中之島散歩を楽しむのはいかがでしょうか。

■編集・発行：北区民センター・大淀コミュニティセンター・都市コミュニティ研究室

■指定管理者：一般財団法人大阪市コミュニティ協会

■発行月：7月・10月・1月・4月の各月下旬発行

北区民センター 〒530-8401 大阪市北区扇町2-1-27  
☒ kitakumin-center@abelia.ocn.ne.jp

大淀コミュニティセンター 〒531-0074 大阪市北区本庄東3-8-2  
☒ oyodo-comini@abelia.ocn.ne.jp

編集後記

新年から筆者は体調を崩してしまいました。職場の近くに開いている病院があるのかも分からず、調べられないぐらいにしんどい。そんな時、その地域に住んでいるアルバイトの方が近くの病院を紹介してくださり、無事に行くことができました。こうした時に地域の人のがたみを身にしみて感じました。いろいろなことが起こりますが、身近な人の声の掛け合いで解決することもあるかもしれません。